

3 H美術教育における評価のあり方

— 自己評価板を活用した評価活動 —

三 梶 正 典 ・ 若 元 澄 男*

Estimation in 3-H Art Education

-Based on the action of estimate using self-estimationboard-

Masanori MIMASU and Sumio WAKAMOTO

Abstract. This study tried to prove the validity of "3-H (Heart,Head,and Hand)art education" focusing on "Head"and "Hand" founded on "Heart". In this study, We adopted a practical study, adding the ideas of "Recommendation of 3-M art education " to the basic idea of "3-H art education".

On evaluation in the classroom, We evaluated students' interests, motivation, and attitude in art class by using the "self-estimation board" that students evaluated their creating process. Based on the evaluation, We investigated the effectiveness of 'Heart', that its' psychological effect draws "Head" and it becomes a cause to trigger "Hand".

Key words : "3-H art education" "self-estimationboard "

I. はじめに

3 H美術教育を提唱する若元は、新3 H美術教育のススメ¹⁾の中で「ほめる・はげます・ひろげる」支援のあり方を示し、ここで「評価」と「ほめる」ことの関係に言及している。この「ほめる」視点をもつことこそ、評価の本来のあり方ではないかと考える。平成14年度より実施された新しい学習指導要領に基づく評価のあり方は、学力を知識の量だけで判断するのではなく、学習指導要領に示されているいわゆる「基礎・基本」を確実に身につけ、自ら学ぶ意欲や問題解決のための考える力、生徒のよさや可能性を生かし自己実現に役立つ「生きる力」につながらなくてはならないとされている。それとともに学習状況の評価も「目標基準に準拠した評価（絶対評価）」へと評価のあり方が大きく変わっていくこととなった。この評価のあり方の転換で最も重視されるのが、学習過程で行う評価活動（形成的評価）ではなかろうか。この評価活動は、学習過程における評価によって個々の生徒達の良さを見つけるとともにそれを伸ばすことにつながるのである。しかし、評価活動の現状は、細かく学習のプロセスを区切りすぎて評価活動を行おうとしているためか、1時間の授業の中でも多くの項目を評価しなくてはならない状況をつくり出している。生徒の良さを見つけ、伸ばすどころか、評価の視点が、チェックや監視のような雰囲気をつくり出し、ランク付けのための評価や、評価のための評価のようになる中で、かえって生徒の学習活動を萎縮させてしまう傾向が見られ始めている。また、毎時間ごとのふり返り（自己

*広島大学大学院教育学研究科教授

点検)なども評価の資料として多く取り入れられ、文章表現が評価活動の中心となり、膨大な資料が山積みになってしまっている場面も多く見られる。生徒の学習活動に対する説明責任が問われ、多くの生徒を限られた時間の中で評価しなくてはならない現状を考えると、いずれも起こるべくして起こる状況と考えられるが、生徒の良さを見いだす「絶対評価」を定着させるためには、その基盤となる「評価観」が問われ、見直されなくてはならないだろう。

上述した諸課題に適切に対応していくことができる評価方法の一つが、今回示す「自己評価板」を使った評価活動である。この評価活動は、「美術による教育」と「美術の教育」の展開によって具体化できる。この中核には、生徒の心をワクワクドキドキ活性化させる「3H美術教育」がある。

以下、「3H美術教育」の基本理念と三梶の授業実践を関連させながら、評価活動を通し、美術科としての基礎・基本の定着を図り、「豊かな人間性」と「確かな判断力」を培い、「生きる力」の育成につながる評価のあり方を述べていきたい。

Ⅱ. 3H美術教育と本校の目指す人間像

3H美術教育とは、現下、美術教育に関する若元の主張の中核をなすものである。この文脈で展開される美術教育の中でこそ、なおかつ十分には達成されていない「美術による教育」と「美術の教育」の双方が達成されるものと考えている。「3H」とは、Heart, Head, Handを指す。図1はこの三者の関係を図式化したものである。Head(頭)とHand(手)をHeart(心)に内包させたのは、Heartの優先性を示したものであり、HeartからHead及びHandに向かう、「一方向矢印」は、Heart(感性、感受性、感覚、感情、関心、意欲等)の活性化が、おのずとHead(知性、知恵、知識、発想、構想等)とHand(技能、技術、技法等)の活性に連動することを想定したものである。これは、自己教育の図式とも整合する。また、3H美術教育は、指導要録の「4つの評価観点」とも対応している。指導要録において、「①美術への関心・意欲・態度、②発想や構想の能力、③創造的な技能、④鑑賞の能力」が示されている。この4つの観点を内容的な視点から再構築すると、かなり高いレベルで「3H」との符合を確認できる。再構築の手順は次の通りである。「①」の冒頭にある「美術」についてはその意味内容と文脈から「表現・鑑賞」という文言に置換できる。否、そうすべきである。すなわち、「関心・意欲・態度」は、「鑑賞」にも欠かせない観点だからである。したがって、第1観点の表記は「表現・鑑賞への関心・意欲・態度」とする。

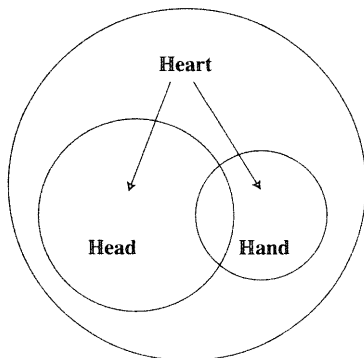


図1 3Hの図式化

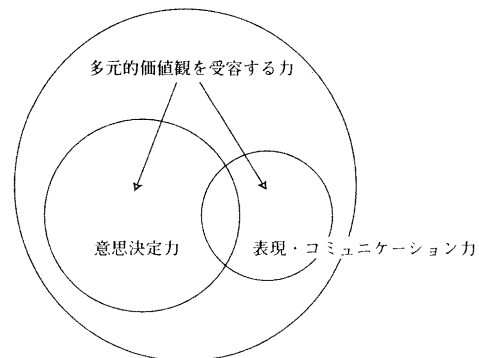


図2 3Hとの対応の図式化

この第1観点の「関心・意欲・態度」は、とりもなおさず Heart そのものである。第2観点と Head の関係は、若干の無理（現行の指導要録の文言で再構築するため）はありつつも、意味的には「発想や構想」と同質の知的レベルの活動で結ぶということで「鑑賞」の文言を付加して「発想や構想及び鑑賞の能力」とする。第3観点の Hand は、原形のまま「創造的な技能」をスライドできる。さて、指導要録に示されている4観点は、以上の通り3Hで括ることができる。（若元澄男）

本校の目指すべき人間像は「自分を見失わずに異なる文化や異なる価値観を受容し、情報を活用しながら他者とのコミュニケーションを積極的に展開でき、よりよい意志決定を目指し行動ようとする人間像」である。その基礎・基本として「多元的価値観を受容する力」「意思決定力」「表現・コミュニケーション力」の3つの力こそが必要であると設定した。そして、本年度から「これら3つの力の評価をいかに行うべきか」を明らかにすべく研究を開始した。この3つの力は、若元の提唱する「3H美術教育」の Heart, Head, Hand と図2のようにそれぞれが対応するのではないかと美術科では考える。

本校の美術科では、これまで3H美術教育における「心（Heart）」の育成を最優先に、Heartを活性化させ、楽しみながら表現及び鑑賞活動を行うなかで自己教育力や主体性、そして美術科教育における「生きる力」を育成していくことができるかどうかを検証してきた。また、一昨年度より3M美術教育（3H美術教育をより確かに構築するための不可欠要件であり、3Mは「みつめ」「みまもり」「みきわめる」眼差しの要求である）の理念を加え、同時に、新3H美術教育（3M美術教育と不離の関係にあると若元は位置づけており、同様に3H美術教育をより確かに構築するための不可欠要件である。新3Hは、「ほめる」「はげます」「ひろげる」支援のあり方を示したものである）の理念を加え、3H美術教育の有用性と必要性を検証してきた。本研究は、「3H美術教育」「新3H美術教育」の理念を中心に評価活動を行い、3H美術教育の文脈の妥当性を証明しようと試みたものである。同時に、3H美術教育の「心（Heart）」を中心とした評価活動が、豊かな人間性を育成し、本校における目指すべき人間像の育成ともつながることを示そうとしたものである。今回の評価の実践化は、3H美術教育における「心（Heart）」、すなわち教科の「表現・鑑賞への関心・意欲・態度」に焦点をしぼり、「自己評価板」を授業に導入した。この「自己評価板」は、「新3H美術教育」の「ほめる・はげます・ひろげる」眼差しを基底におき、各自の本時の授業への取り組みの「関心・意欲・態度」を振りかえらせようとしたものである。以下は、その実践である。

Ⅲ. 具体的評価方法と実践

1 自己評価板を使った評価活動

(1) 方法

自己評価板を使った評価活動は、毎時間授業終了後、美術教室の出入り口に「自己評価板（図3）」を設置し、各自で本時の自分の授業の取り組み（興味・関心・態度）の自己評価を公開の形式で付けていく。各生徒は自己評価板にあらかじめ付いている出席番号の磁石から自分の番号を取り、その磁石を自己評価板に示された5段階の評価基準（とてもよくできた・よくできた・ふつう・でき

なかった・まったくできなかった)に照らし、その区分された場所に自分が判断し、磁石を付ける方法である。教師は、全員が磁石を付け終わったらその付けた状況をメモして確認をする。自己評価板の評価活動を通して課題であると判断した場合は、その状況に応じて個々の生徒に休憩時間や放課後の時間を使ってインタビューなどの方法を通してその理由を確認し、次時までには克服できるように指導・支援を行う。

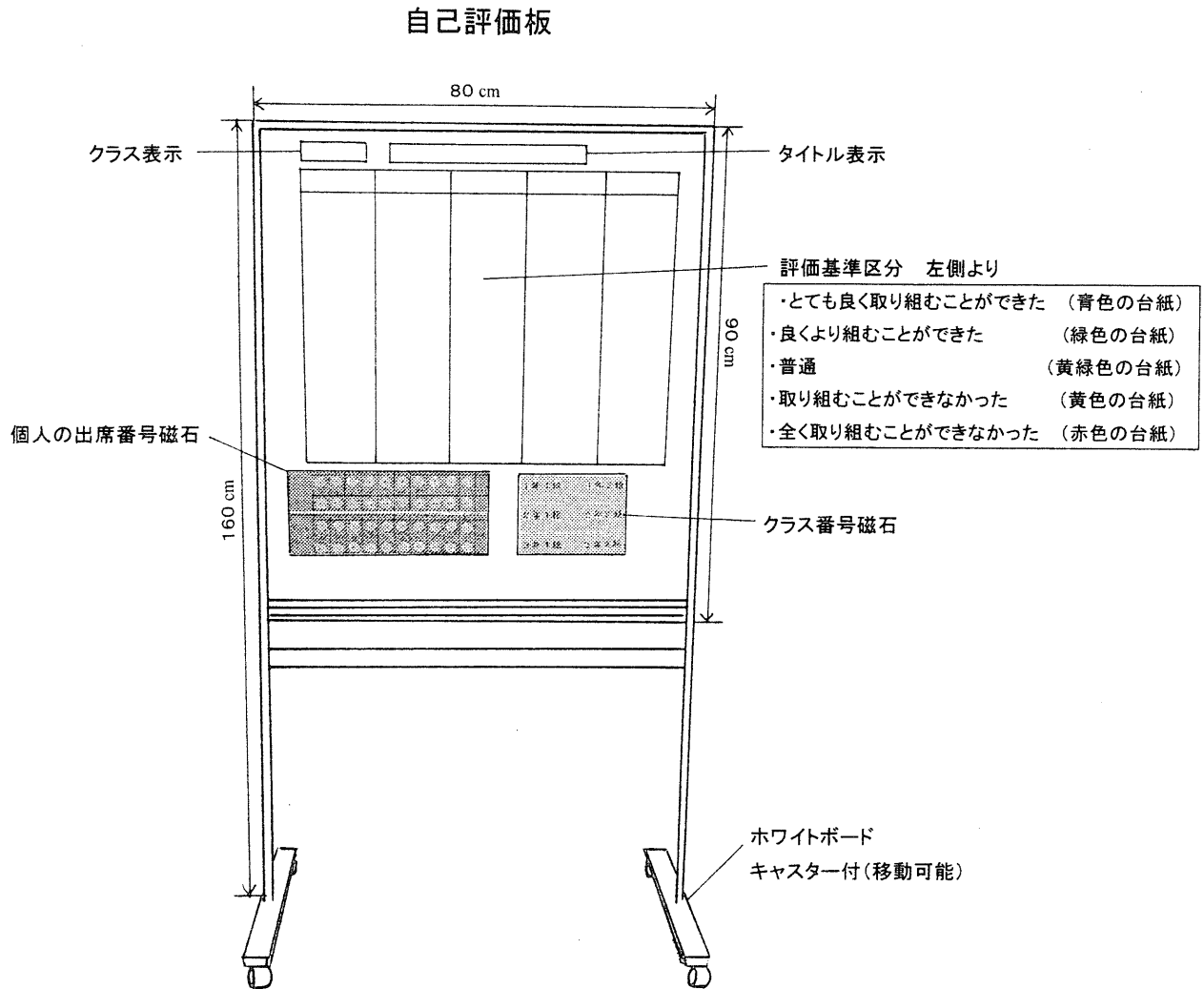


図3 自己評価板

2 「自己評価板」を使った自己評価活動における生徒の意識調査

自己評価板を使った自己評価活動における生徒の学習活動に関する意識の変化をはかるためのアンケートを実施した。

被験者：本校生徒 (210名 男子100名 女子110名)

調査時期：平成14年11月 (自己評価板による評価活動を始めて3ヶ月後)

調査項目：「ワクワクドキドキ度」4項目、「自分流チェック」12項目について5段階による評定尺度とその他自由記述で構成した。

VI. 調査結果と考察

1 ワクワドキドキ度

ワクワクドキドキ度とは、若元の「3 H美術教育」の理念の心 (Heart)が活性化しているかどうかをはかる手だてとしたもので、関心の度合いや心の高まりの状態を十と一の5段階で尋ねたものである。調査項目は「授業に対する関心・意欲・態度」「アイデア・発想・構想などの創造性」「道具の使い方などの技法・方法」「自分や友達作品への鑑賞」の4項目を設定し、「3 H美術教育」「本校の目指す3つの力」「指導要録の4観点」との関連をはかった。図4は、自己評価板を導入した評価活動と、自己評価板を導入する以前の評価活動のワクワクドキドキ度を比較したものである。

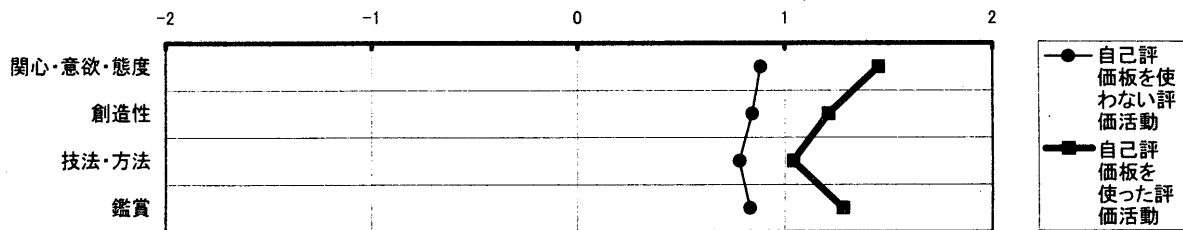


図4 ワクワドキドキ度集計結果

いずれの項目についても自己評価板を使った評価活動の心 (Heart)の活性化の度合いは、導入する以前の評価活動と比較して高い数値を示している。特に「授業に対する関心・意欲・態度」に関する項目は、その他の項目と比較して活性化の度合いは高い。

2 自分流チェック

自分流チェックとは、心 (Heart)から発想・構想 (Head)や創造的な技能 (Hand)にどう関わっていったのかをはかる手だてとしたもので、自己評価の形式で自分の到達度を「できるようになった」～「できなくなった」の5段階で尋ねたものである。ワクワクドキドキ度と同様に「3 H美術教育」「本校の目指す3つの力」「指導要録の4観点」との関連をはかり、12項目設定した。図5はその数値をあらわしたもので、到達度の数値が高くなっている。

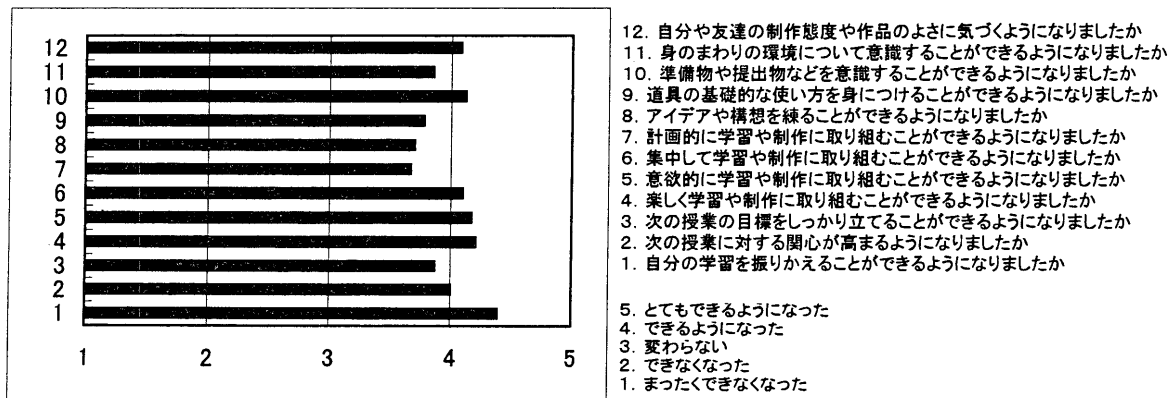


図5 自分流チェック集計結果

3 自由記述

自己評価板を使っでの評価活動を始めてから生徒個々に感じた事柄を文章で自由記述させた。

下記のものは、その中から顕著に変化したと思われるものを選んだ。

- ・前回の振り返りが簡単にできるようになり、自分の良い点と良くない点がみつけやすくなった。
- ・評価板が常にあることによって美術の学習に対する考えが少しずつではあるけれど変わっていったと思います。評価板があることによって何となく「やる気」が起きるような気がします。
- ・授業が終わってからその日のがんばりを磁石で表すって考えると、みんなのがんばりの様子も見えるから、以前よりもがんばって良い方に付けるようにしようと思うようになった。また、周りの人を意識するようになった。人に見てもらうために頑張っているんじゃないけど、人を気にして頑張ると自分に力がついてきたと思う。
- ・自己評価板で評価活動をするようになってから、よく集中できるようになった気がする。集中することで、技法などの技術も高まってきたと思う。なるべく「とてもよく活動ができた」に磁石を付けたいたいという気持ちが出てきて、前よりも制作活動が自然にスムーズになりました。また、今日よりも次回はもっと頑張ろうと思えるし、みんなの評価活動の様子もわかるのでとても参考になる。
- ・何よりも振り返りをするすることで、次回への目標や、現在のすすみ具合などがよくわかるようになった。また、自己評価板なら磁石を置くだけでいいのでとても簡単で分かりやすく続けやすいやり方だと思いました。
- ・すばやく評価ができていい。これがあると一番良い評価にしたいからがんばることができる。
- ・友達がその授業をどのように受けたのか、どう思ったのかなどがわかるようになった。
- ・自分の行動の一つひとつを反省できるようになった。友達の作品への関心がたかまった。
- ・次はどこをがんばればいいのかわかるようになって、授業が、前よりももっと楽しくなった。
- ・自己評価板のおかげかどうかわからないが、以前よりも少し意欲がわいてきたような気がし、作品にますます自分の個性が表れてきたような、そんな感じの変化が微妙だがあった。
- ・自分の力（集中力）を出せるようになった。友達の作品に興味が出た。
- ・評価板を使うまでは、何となく普通に普通の早さで制作していたけど、使うようになってから楽しく、そして早く制作出来るようになった。
- ・自分の集中さや、その日のがんばりがわかるようになった。友達とがんばり合えるようになった。
- ・自己評価板を使うようになって、他の人の作品によく目を向けるようになった。
- ・人の作品を見るのが上手くなったと思う。アイデアが豊富になった。
- ・みんなの評価が分かるので、今度からは気を付けようと思えるようになった。
- ・自己評価板を使うようになって、今日は〇〇ができるようになったかな？集中はできているだろうか？など、いろいろなことを考えるようになりました。

第2学年 2002年・平成14年11月6日

興味・関心・態度 自己評価表

題材名	ほりほり		内容	ワークシート作り	時間	2/6
	とても良く取り組む事が出来た	良く取り組むことが出来た	ふつう	取り組むことが出来なかった	全く取り組むことが出来なかった	
1組	男 17 16 15 14 13 12	15 14 13 12				
女	24 23 22 21 20	24 23 22 21 20				
2組	男 10 11 12 13 14 15	1 5 13 6				3 2 2
女	30 29 28 27 26 25	29 28 27 26 25 24				24 23 22 21
気づき	1組 6組のワークシート 2組 6組のワークシート 6組 14組のワークシート 2時にも確認したい 2時 7時～4時～2時～2時～					

自己評価板に個々の生徒が評価活動を行った後、記録用紙にその結果を記録しておく。記録は、左(図6)のように生徒が自分の出席番号の磁石をそのまま置いた通りに記入していく。境界線に置いたり、重ねて置いたり、仲の良い仲間と並べて置いたり、様々であるが、評価活動を生徒の中でも楽しんで行っている様子もうかがえる。記録の段階で気になる生徒については、直ちにコミュニケーションをとり、課題を確認し、次時には解決できるように指導・支援を行っている。

図6 自己評価板記録用紙

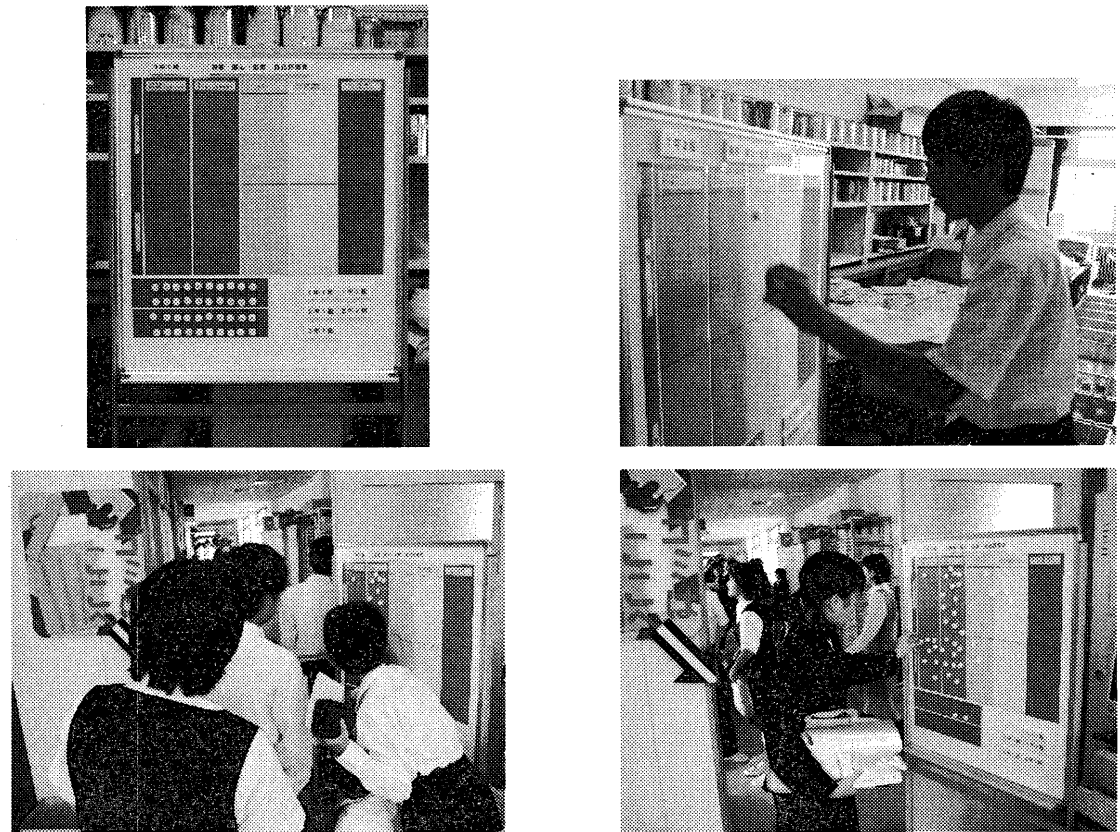


図7 自己評価板を使つての評価活動風景

Ⅶ. まとめ

若元の「3日美術教育」の基本理念のもと「自己評価板」を用いたオープンな評価活動を通して、その評価活動が、心(Hear)を活性化させるものであるのかどうか、またそれがHead,Handに作用していき、生徒一人ひとりの「自己実現」から「生きる力」とつながっていくのかどうか、その有効性をはかる取り組みを行った。考察にもあるように「自己評価板」を用いたオープンな評価活動は、心(Heart)を活性化させるうえでの有効性を確認することができた。また、その評価活動は、自由記述の文中の「人の作品を見ることが上手くなったと思う」「友達とがんばり合えるようになった」に見られるように、自然な形で、お互いに「みつめ・みまもり・みきわめ」、さらに「ほめる」「はげます」という評価活動につながったと考えられる。すなわち、「自己評価板」を導入したことにより、「美術に関する関心・意欲・態度」のみならず、「自己」や「他者」に関する「関心・意欲・態度」を高めることができたようにも思う。合わせて「発想・構想及び鑑賞の能力」の意識も高めている。このことは、本校の目指す力の「多元的価値観を受容する力」を培い「表現・コミュニケーション力」を伸ばす方向性を示すことができたのではないと思われる。下の記事は、今年度心を活性化させるために行ったゲストTeacherによる授業であるが、授業後の自己評価板の結果(図8)は、筆者が行った同様の授業と比較すると、「とても良く

ニンジン彫れば 心も満腹

広島市南区東雲3丁目の
広島大付属東雲中学校で22
日、ニンジン彫りコンテストを
行う。3年1組の生徒38人が
参加した。

講師を務めた甘日市平
町の中華料理店「曾根」の
曾根英徳店長(40)が「見た
目が美しく、心も満腹にな
るような一品を作る」とな
どを指導。小刀でニンジン
をチョウチョウの形に切る
作業に挑戦したが、羽の部
分は厚さわずか1センチ。う
まく切れず途中途中でぎ
れてやり直す生徒たち
は悪戦苦闘していた。

藤瀬里紗さん(15)は「食
べるのがもったいない。今
度はタイコンで白いチョウ
チョウを作ってみようか
な」と話していた。

広島大付属東雲中で美術の公開授業



ニンジンでチョウチョウを作る生徒たち
=広島市南区の広島大付属東雲中学校で

シェフが美術授業 ニンジンでチョウ

広島大付属東雲中



「見ても食べてもおいし
い料理を作る工夫を知
って」。南区の広島大付
属東雲中が二十二日、中
国料理のシェフ曾根英
徳さん(40)を講師とし
てチョウを作るユニ
ークな美術の授業をした。

生徒は三年一組の三十
八人。曾根さんは、中華
饅頭店に作り手、
曾根さんは甘日市平
に店を持つ、九年前には
中国の豆料理「満漢全
席」の全席九十九品を再
現した。同校美術教師の
三柵正典さんが「生活に
来る友人で、「生活に生
きる美術を学ばせたい」
と講師を依頼した。

佳織さん(15)は「水分が
多く難しかった。家族の
サポートがあった。

↑ 中国新聞 2002. 11. 23
← 朝日新聞 2002. 11. 23

自己評価板の評価基準	とてもよくできた	よくできた	ふつう	できなかった	全くできなかった
事前のゲストTeacherを招かない授業	29	6	2	0	0
ゲストTeacherを招いた授業(当日)	33	4	0	0	0

図8 授業後の自己評価板結果(3年1組)

取り組むことができた」の度合いは、高いものであった。心の活性化を基盤においた今回の評価の実践は、より確かな「自己実現」に向かうことができる方向性も示すことができたと言える。しかし、今回の評価活動の中で、自己評価活動の「基礎・基本」となる「自己評価力」に関しては、十分な成果を示すには至らなかったのではなかったと考えられる。この課題は、「3 H美術教育」の創造的な技能(Hand)や本校の目指す3つの力の「意思決定力」の不十分さも同時に示すものと考えられる。創造的な技能への過度な視点の傾斜は、技能・技法習得優先の単なる「美術の教育」へ向かう恐れもあるが、今後は、これらの課題をふまえ、本校が基礎基本として必要とする「多元的価値観の受容」「表現・コミュニケーション力」と「意思決定力」のつながりを「3 H美術教育」との関連性のなかで整理していき、「多元的価値観の受容」「創造的な技能」「意思決定力」を育成していく有効な手だてとそれを支える評価のあり方を模索していきたいと考える。

VI. 追補 (若元澄男)

筆者(若元)の美術教育上の最優先課題は、個々の子ども達の3 H (Heart, Head, Hand) の育成であり、この図式をふまえた美術教育の具体化である。今回の三柵の取り組みは、「3 H美術教育」の不可欠条件ともいえる「新3 H美術教育(ほめる・はげます・ひろげる)」及び「3 M美術教育(みつめる・みまもる・みきわめる)」をふまえつつ「3 H美術教育」の理念を「評価法」に具体化したものということができる。

本稿冒頭、三柵が指摘したように、昨今、「評価」に関して若干の混乱が発生していることは誰しもが認めるところであろう。この状況の延長線上、またぞろ「評価のための評価」というような文脈が出てくる可能性も否定できない。今回の「自己評価板」の提案は、こうした状況への三柵の危機感から発されたものと受け止めるべきであろう。

さて、前段までの三柵の論述によってすでに大方の了解は得られていると思うが、今回提案している評価法はこのうえなくシンプルかつ容易である。生徒及び教師にとって一切の面倒な手続きや不自然な負担がない。美術の授業を終えた生徒達は教室の出口に向かう。そこに、くだんの「三柵特製評価板」が設置されている。過日の公開研究会において一部始終を観察した。生徒達は、いかにも自然体で思い思いのレベルにマグネットを置いたのである。この評価法のメリットは、単に筆者の印象ということではなく、生徒達の感想、三柵の授業後の所見等から、あらためて確認することができた。以下の通りである。

- ① 個人内評価の視点を基本に、個々の学習活動の時間的変化をたどり、関心・意欲・態度の発現や形成過程を見つめることができる。
- ② 外に現れた自己評価をとらえ、即座に個人にインタビューするなどして個々の生徒の実態を把握する。このことによって生徒の内面や内面の変容を表す「言葉」や「行動」を見つめることができる。
- ③ 一人の自己評価にかかる時間は、約5～10秒程度の短時間なので、制作や後片づけ、あるいは次時の他教科の授業への支障にならない。また磁石を付け終わった状況のメモ(教師による転写)も

1～2分程度で行えるので、膨大な量の資料が手元に残ったりするなどの負担がない。(メモを取る時間のない場合は、デジタルカメラなどを使い、後から整理する方法もある)

- ④ オープンで磁石を付けていくので生徒同士のコミュニケーションの場や仲の良い友達と並んで付いたり、重ねたり、評価基準の境界に付いたり、様々な状況を観察することによって、生徒同士の相互評価や人間関係を見つめることもできる。
- ⑤ 初期段階の関わり、展開段階での創造的な取り組み、発展段階での自己実現につながる等々、それぞれの学習の進行段階によって生徒の個々の状態や変化を見つめることができる。
- ⑥ 長期に渡って観察・記録することによって生徒の関心・意欲・態度の現れや変化を捉え、評価・評定の資料として利用することができる。
- ⑦ この評価は、授業者の授業に関する自己評価にもつながる。教師自身を見つめることができる。

未整理ではあるが、とりあえずこうしたメリットをあげることができる。なお、今回の自己評価の観点は、「美術及び鑑賞への関心・意欲・態度」にしばられたものであったが、今後の課題としては、学校の育成課題との関連を図った評価、3Hにおける各々のHの達成度に関する評価、そして、題材毎の評価規準の整理等々が考えられるであろう。これらについては、今後の三柵の実践の中で整理されていくものと考えている。

ところで、この「評価板」開発のきっかけは、評価に関する三柵との議論に遡る。その際、呉市立白岳小学校の下園教諭の評価法を三柵に紹介した。すなわち、図9のそれである。授業終了時、個々の子ども達が本時における自分の活動を振り返る。「ニコニコひまわり」「普通の顔ひまわり」「ムツリひまわり」の3段階のどのレベルにあったかを自己

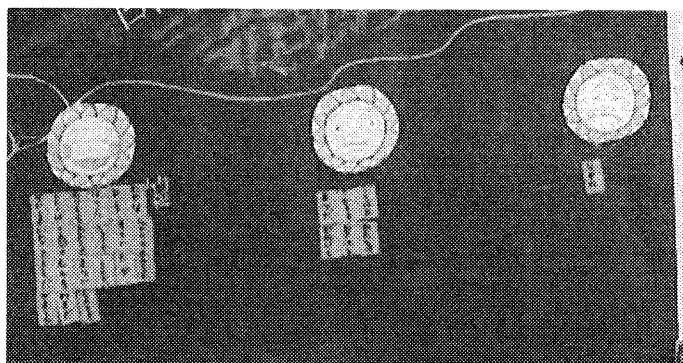


図9 呉市立白岳小学校下園珠恵教諭の黒板

評価し、磁石シート(各々の名前が書いてあるシート)を、三つのキャラクターの下に貼り付ける。教師は、一目瞭然、瞬時に各々の子どもの状況を把握することができる。下園教諭の場合、「普通の顔ひまわり(6名)」「ムツリひまわり(1名)」に貼付した7名については、「なぜその位置なのか」を授業直後に子どもから聴取し、教師としての対応策が即座に構想されていた。さらに、こうしたオープンな評価は、子ども同士がお互いの「いま(状態)」を把握できるというメリットもある。「なぜ、今日、A子ちゃんは、『ムツリひまわり(1名)』なの?」というような「心配」も発生する。この心配は「おもいやり」の形成につながる可能性も秘めている。極めてシンプルな評価法でありながら大きな意味を含んでいる。また、教師の評価活動が子ども達に確かに還元されているのである。おおむねこんなことを三柵と再確認した。「三柵特製評価板」は、こうしたプロセスを経て開発されることとなった。

引用・参考文献

- 黒瀬基郎ほか、「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造(3)」、広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」、第35集、2003
- 三柘正典・若元澄男、「3H美術教育における基礎・基本と美術授業の創造」、広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」、第34集、2002、pp. 73～82.
- 文部省、中学校学習指導要領解説—美術編—、1999.
- 若元澄男、「再考『3H美術教育のススメ』」、広島大学教育学部附属実践総合センター学校教育実践学研究、第8巻、2002、pp. 115～124.
- 新3H美術教育のススメ¹⁾
- 三柘正典・若元澄男、「学ぶ力を育てる美術授業の創造—ある一定の枠はずしを通して(3)—」、広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」、第32集、2000、p. 80.